

2012年1月6日

## 博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学  
研究科名 人間科学研究科  
申請者氏名 サラ・J・フレッチャー (Sarah, J. Fletcher)  
学位の種類 博士 (人間科学)  
論文題目 Mentoring Teacher Researchers; a self-study  
研究者としての教師に対するメンタリング研究：セルフ・スタディ  
論文審査委員 主査 早稲田大学教授 野嶋栄一郎 博士 (人間科学) (大阪大学)  
副査 早稲田大学教授 森本 豊富 Ph. D. (UCLA)  
副査 早稲田大学准教授 森田 裕介 博士 (学術) (東京工業大学)  
副査 早稲田大学教授 浅田 匡 修士 (学術) (大阪大学)

本学位申請論文は、自らの(教育的)実践が、学校教師に学習を生み出し彼らの専門性における研究能力を伸長することを示したセルフ・スタディである。セルフ・スタディは、Mills, C. W. (1959)による、個人的な問題は単なる個人的問題ではなく、公の問題と歴史の観点から理解されなければならないという枠組みに基づき、生態学的な探究、アクションリサーチ、教師教育におけるクロスカルチャルな研究などから生まれて来た研究方法である。本研究の特徴を踏まえ、本審査報告では、各章の概要を示すのではなく、学校教師が協同で授業実践に関わる知識を創り出すことができる研究能力を育てる「教育的リサーチ・メンタリング」のモデルの特徴を述べ、それを実践してきた方法とその有用性を示すこととする。

### 1. 問題

教師の職能発達において、PCK (pedagogical content knowledge: 個々の教科内容をいかに教えるかという知識)の重要性は明らかにされているが、そのエビデンス(証拠)多くは教師自身の自己報告から引き出されたものである。しかしながら、教師の自己報告は主観的であるなど、研究として信頼できるものではないという批判が強い。一方、研究者による実践研究において、研究者は必ずしも学校現場の問題を熟知してはいないため、具体的な教育実践の問題解決につながるとは限らない。すなわち、研究者と実践者との建設的な対話が成立することにより、PCKの発達をはじめとする教師の職能発達に意味ある研究を行うことができる。また、教師が学校を基盤とした探究活動を行うことは、教師自身の実践の自己評価や教師の学習に重要な役割を果たすのである。したがって、教師自身が研究者と建設的な対話を行なうためには、教師自身が研究能力を培う(教育的)リサーチ・メンタリングが有効な1つの方法であると考え、実践を行い、実践の中でその有用性を確認してきた。具体的には、主要なリサーチクエスションは以下の通りである。

- (1) リサーチ・メンタリングとは何か?
- (2) どのように私は、研究者である教師 (teacher researcher) をメンタリングするのか?
- (3) どのように私は、教師に自らの学習を引き出し、表現し、広めることを支援するのか?

### 2. 教育的リサーチ・メンタリング (ERM: Educational Research Mentoring) の概念

ERMの特徴は、次のように整理できる。

- (1) ERM は、学校を基盤として直接に教師の実践とその生徒の学習を改善することができる、日常的に実行できる探究へと教師の注意を向けることを支援する。
- (2) ERM は、実践者と研究者による互いの研究に、支持的かつ批判的にかかわることを支援する双方向の育成プロセスである（互惠性）。
- (3) ERM は、データ収集とその分析の新たな方法に関して潜在的可能性を提供する。
- (4) ERM は、実践者と研究者との創造的な協働を促進しうる。

本論で示された、これらの特徴を持つ ERM モデルは、Mullen, C. A. (2006)によるメンタリング・モデルとメンターとメンティのキャリア発達を拡大しうる両者のダイナミックな互惠的な関係という点では同じである。しかしながら、以下の2点において重要な差異がある。まず、メンタリングの効果に関して、Mullen のモデルはリサーチ・メンターの選択が重要であるとするが、本論で提案された「生成性(generativity)」概念に基づくメンタリングにおいてはすべての教師へのリサーチ・メンタリングは可能であると考えられる。そして、メンタリングの内容に関して、Mullen は研究に関するスキルの獲得を中心にしているが、メンティに対するパーソナルかつ専門的（スキルの獲得を含む）な次元が不可欠であると考えている。前者は、これまでのメンタリング関係におけるメンター選択の影響とは異なった知見である。後者については、本論で主張されているメンタリングの効果として教師の専門能力の価値・スキル・知識と理解とも対応する主張であり、同時に企業におけるメンタリングにおけるキャリア機能と心理社会的機能とをリサーチ・メンタリングにおいても重視した結果と考えられる。

### 3. リサーチ・メンター (RM) の特質

ERM モデルに基づく実践を行うとすれば、RM の特質がその実践の効果を左右することはいうまでもない。RM は、従来のメンターとは異なり、学校におけるリーダー的役割を果たすことも求められる。かかる問題に対して、本論は Lick, D. (2000) のピア・メンタリング、Rowley, J. B. Ildsen (1989) の「よきメンター」の6つの特質、さらに Robertson, J. (2009)によるリーダーシップを育成する15のコーチの特質を踏まえ、医学分野におけるすぐれたメンターの特質 (Kjeldsen, K., 2006) を加えて、RM の行動パターンとして同定できる7つの特質が明らかになっている。それらは、非指示的コーチ、指示的コーチ、アカデミック、教師、RM になる生成的な可能性の提供、協働探究者である。この7つの特質について、2人の RM と自身の実践について分析を行い、特に自身の実践の分析から、RM については、「リサーチ・メンティの個別のニーズを尊重し評価する必要がある。」など5つの知見を得ている。それらを踏まえて、本論では RM の5つの役割が明らかにされている。

- 1) 教師と協働する RM により、教師は自らの研究を行うことができる。
- 2) RM は、教師が教室で生じていることへの理解を引き出し、新たな知識を創造することを支援する。
- 3) RM は、生成的な方法によって教師自らの思考のネットワークを探究するように奨励することによって、教師が探究を進めながらそのプロセスとその時点での成果を明確に述べることを支援する。
- 4) RM は、教師を探究へと導き、メンターが問う質問への答えを知るのではなく、いつメンターが新たな思考の方針をはじめたいかを知ることである。
- 5) RM は注意深く聞き、質問をすること、再思考を促すようなフィードバックなどによって探究を進める。

### 4. 研究メンタリングと ICT 技術の活用

実践者がアカデミックな研究（研究者による研究）から学ぶことは多いが、それらは実践者自身の教える状況とは異なった状況での研究であり、自らの実践への洞察を熟練教師が行っていることを考えると、状況論による学習という視点が必要である。また、「すぐれた実践」ビデオから学ぶということだけでも、例えば、PCK の発達には不十分である。本論では、すぐれた実践ビデオを、研究者であれ実践者であれ、彼らの研究に埋め込むことという方法によってリサーチ・メンタリングにとって有効になると考えられた。このことは、従来の問題を同定し、その解決策を探ると問題解決プロセスではなく、職能発達の基礎となる、既に実践されたすぐれた実践を評価する（価値を見出す）ことから始めるということの意味している。同時に、リサーチ・メンタリングを通じて、教師は、実践者と研究者とともに妥当とされるエビデンスを総合する、体系的で信頼できる研究を行うことを学ぶ必要がある。

このような考え方にに基づき、すべての教師に対応する方法として、コスト面からもウェブを活用することがより良い方法である。本実践では、フリーソフトである MERLOT System を用いたが、教師自身が使うにもほとんど支障がなかった。Bitterene Park School や Westwood St Thomas School での実践など、ERM における ICT 活用研究は、TLA (Teacher Learning Academy) によって最高の評価を受けた (2009)。

したがって、ウェブ活用は、リサーチ・メンターである教師にとって最善の方法であり、研究者、研究者である教師にとって授業に関する知識を生成し、リサーチ・メンタリングを生み出していくために協働することができる潜在的な方法である。すなわち、ICT 技術の活用は、教師が自分自身の言葉で自らの知識を伝達できる方法、そして研究者と教育的対話ができる方法として有用であるだろう。同時に、研究者は実践者と共同で自らの実践を研究すべきであり、熟練教師と初任教師の知識を引き出すストラテジーを学ぶ必要がある。

さらに、ICT 技術の活用は、学校間のネットワークの機会、教師間の対話を生み出すことにも有用である。このことも Bitterene Park School での実践で明らかにされている。

以上から、本論文は、(1) 知識創造における教師と大学が協働することを支援するメンタリングと統合した自己研究であるアクションリサーチ・モデル、(2) 学問における ‘generativity’ 概念の創出、(3) 教師が互いに研究者としてのメンターになることを可能にし、専門的実践を促進するメンタリングを研究する生成的モデル、(4) 反省的探究と改善の基盤として教育者が自らの実践を理解することを支援するように可視化とビデオ技術の統合、にオリジナリティが認められ、それらについて 1992 年からの自らの著作等との関連からセルフ・スタディとして述べられている。なお、本論文で扱われた主な学術論文は以下の通りである。

- (1) Fletcher, S. J. (2007) ‘Mentoring Adult Learners; Realising Possible Selves’ in Rossiter, M. (ed.) *New Directions for Adult & Continuing Education*, pp. 75-86 New York, USA, JosseyBass
- (2) Fletcher, S. (2007) ‘Educational Research Mentoring and Coaching as Co-creative Synergy’ in the *International Journal of Evidence Based Coaching and Mentoring*, Vol. 5 (2) pp. 1-10
- (3) Fletcher, S. J. (2006) ‘Technology-enabled action research in mentoring teacher researchers’, *Reflecting Education Journal*, Vol. 2 (1) July 2006, pp. 33-54
- (4) Fletcher, S. (2012, in press) ‘Fostering the use of web-based technology in mentoring and coaching’, in Fletcher, S. and Mullen, C. *The SAGE Handbook of Mentoring and Coaching*

*in Education*, SAGE Publications, London

(5) Fletcher, S. (2012; in press), 'Coaching in Education' in Fletcher, S. and Mullen, C.

*The SAGE Handbook of Mentoring and Coaching in Education*, SAGE Publications, London

最後に、審査会では、本研究の国際的な視点などについて質疑が行われ、適切な対応がなされた。本論文のオリジナリティおよび審査会での対応を踏まえ、本博士学位論文「Mentoring Teacher Reseachers; a self-study」は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。